いらつめ

第三號

明治二十年九月十日發兌

目次

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令德を進め、及び地位を高むるにあり、家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令德を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尙の風を養ふべし、その他時時の要報及び評論を掲くるものあり、

左の諸君ハ此度更に本社の業務を協賛し論文を寄せんとを約諾せられたり。

華族女學校勤務 佐野安君
同 秋山四郎君
東京高等女學校勤務
理學士 鮫嶋晋君
理學士 宮崎道正君
文學士 天野爲之君
文學士 高田早苗君
文學士 岡田良平君
醫學士 竹中成憲君
法學士 一木喜德郎君

いらつめ

女子の地位を進むるに付ての注意。其二。

余儕は前號の紙上に於て明治年間日本文化の性質を概評し、其進歩は心生的の進歩にあらずして層生的の進歩たる所以を述べたり。而して社會の改良に於て濫に虚形を擬することの危き所以と、女子の地位に外觀の進歩を望むの非き所以とに付て讀者の方々の注意を促したり。去れば余儕はいまここに辨論の歩武を進めて、女子の地位を進むるに付て要すべき注意の第二點にまで入らんとす。而して余儕が主として論せんとする所のものは女子の地位を進めんが爲の方向これなり。

世の人女子の地位を進むるに付ての方案を計畫せるもの其人に乏しからず、然れども余儕を以て之を見れば社會の圓滑と家內の幸福との上に十分の重をおきて之を論ずるものに至りては殆之を見出だしがたきがごとし。蓋

近來頻りに女權の伸張を唱ふる一種の論者あり、其說に曰く「婦女も能く男子と其智術を競ふべし、もし男子にして政治に與らば婦女もまた之に與るべし、男子にして軍に出でなば女子もまた戰に出づべし、人生の榮名は豈獨男子の擅にする所あらんや………」と。或はまた甚しきに至りては謀略を以て女權の伸張を計畫べしとまで立騒ぐものあり。要するに一として男女の關係をして相爭ひ相敵さしめんとするものにあらざるはなし。嗚呼輕薄論士の言概ね斯くのごとし豈これ幾許か其弊を社會に及ぼすことなきを保せんや、歎ずべきかな。いまこれを生理の學に質すに身体の構造より精神の樣に至るまで一として男女の差あらざるはなく、就中其性質のごときに至りては一は勇悍猛烈にして爭鬪を好み、一は温柔伶俐にして遲疑するの傾あり。無心の小童に於て見るも猶これあり、女兒は感覺鋭敏にして愛顧を喜び、賞讃を樂み、乳臭にして偶人を抱きて慈母の愛育に倣ふも、男兒は之に反し強傲にして區區に念慮を煩はさず常に放膽し、或は劔を提て勇士の馳逐に擬するものあり。畢竟するに男女の間にある差は人爲の教育によるにあらずして自然の然ら

なむる所なるが故に其別々の事業に從ふの社會の爲に便利なることは更に余儕の言ふを待たざる所なり。今それ男子強しとて、決して獨立つことは能はず、女子弱しとて必しも缺けたるものありとせず。苟も男女其本分を全うせんと欲せば偏に之を其一方に望むべからざるなり。男子の能獨にして全からず、女子の能孤にして立たず、こゝに於てか二者相合して後始めて完全を得るの理明かなり。これ余儕が男女相犯すの同權說を退けて、男女一体の美風を希ふ所以なり。余儕は猶この點の論辨を盡くすべき筈なれども、今後社會に於ける女子の地位を論ずる時に於て詳論せんと欲するを以て、今こゝにこれを詳にせず。されば男女の差より之を論ずるも社會の便利より之を見るも、社會の圓滑を保ち、一家の幸福を得んには男女の關係をして相賴り相愛せるの途に出でしめんこと女子の地位を進むるに最大切なるがごとし。然りと雖、余儕が相賴り相愛せると云ふは彼の浮薄論者の云ふごとく謀略を以て男子を籠絡して己に賴らしむべし、良人の幸福を細君の掌に握り女子の勢を夫の上に及ぼすべしなど云ふがごとき殺氣を帶びたるものにあらず。余儕

が所謂相賴るとは男女各其本分を全うし、　女は女に相當の事に任じ、男は男に適ふ業に從ひ、分業の擔任其宜きを得て一家の生活を支へ、一家の幸福を享くるを云ふなり。　然り、而して天禀の賦性と社會の便利とによりて女子の任ずべきもの或は家政の整理と云ひ、或は衞生の準備と云ひ或は子女の養育と云ひ、皆是人生の務にして其一を缺かんか、既に人生の最大幸福を全うすることと能はざるものなり。　畢竟するに男子が外に奔走して汲々たる所以のものは唯女子をしてこれらの務を全うせしめんがための資料を供ふるが爲に外ならず。　故に女子にして苟もこの整理とこの準備とこの養育とを成すことを能はざれば、其終に男子と同等の地位に立つこと能はざるに至る。これまた止むを得ざるのことのみ。　されば女子にして社會に於て其必要を増し、其地位を進めて男女同等の美域に達せんと欲せば宜しくまづこれらの分擔の業務を仕遂ぐるの用意を爲さざるべからず。　家政の整理を得んには家政學の智識を求め、衞生の準備を爲さんには生理健全學の通理を覺り、子女の養育を全うせんには育兒、家庭の敎育の理を知るごときはまづ其急なるものなり。　余輩

か所謂相愛とは唯卑しき肉体の關係より生ずるものを云ふにあらずして精神に感ずる同情相愛の念を云ふなり。男子の爲す所は女子これを思ひやり、女子の任ずる所は男子之を察し、互に相扶くるの心意氣にして蓋十分なるものありせバ男女一体夫婦和合の幸福を得んこともとより難きことにあらず。然り、而してこの情念を生せしめんには他なし、これを平等の智識に求めざるべからず。今日の有様にては女子の一般の智識は男子の一般の智識よりも下れるがごときを以て、動もすれバ女子が男子に向ひて同情相愛の念を有てることと甚淡泊なるがごとし。されバ眞に女子の地位を高めんには宜しくまづ一般に智識の進歩を計らんこと頗大切なりと云ふべし。某學士日本の女子を批評して「日本ノ女子ハ食客ノゴトク、贅澤物ノゴトシ」と云ひたりとかや。中等以下の社會はしバらく措き、彼の所謂上流の社會にありては必しもこの嫌なしと云ふべからず。家内の事にいたりては全く無學にして皆これを他人の手に委し終日無聊に苦しめるもの丶ごときこれ贅澤物の外觀あり。或はまた夫たるものが外にありて何事に苦心せるや一向に之を察せず、夫

は夫、婦は婦と云はぬばかりにして毫も同情相愛の情念を發さず殆他人のごときものこれ食客のごとき外觀あり。かくのごとくにしてこの社會に於て細君の輕きこと風前の塵のごときもまた當然のことなり。嗚呼其罪これを誰に歸せんや。

あれに由りて之を觀れば、今日に於て殆零度にある女子の地位を進めて男女同等の域に達せしめんには、まづ女子一般の智識の進歩を計り、男女をして相頼り相愛さしめんことを我邦社會の爲に、一家の幸福の爲に最願はしきことなりと云ふべきなり

月報

○通俗婦人講談會。前號に記載せし仝第一回は去月廿一日麹町小學校に於て催されしが、聽衆の婦人百餘名にて、石橋助三郎氏先開會の主意を述べ次て貫名綾子、安川政次郎、木村貞子、鶴橋國太郎の諸氏交々婦人に有益なる事項を極々平易に講談せられたり。又仝第二回は來る廿四日(第四土曜)午後三時

より前會の如く麹町小學校に於て催さるゝ由にて例に依り傍聽無料傍聽者は婦人に限る由、又今回は醫學士竹中成憲氏も婦人の衛生に關して演説す。

○東京金蘭會。 仝第五回は來る廿五日(第四日曜)午后一時より催し今回は音樂取調所より樂人を聘し諸學士の演説もありて一層盛大に開會せらるゝ由なり。

○靜岡の束髪婦人。 靜岡にては婦人の髪と髱とを出して束髪を結ふ事流行して小量の油をも附ける由、日本の婦人には少し髪と髱との出たる束髪の似合はしきを說く西洋人は定めて喜ぶなるべし。

○大坂通信。 女學校。 當地にて女學校の主なるは府立高等女學校、愛敬女學校、私立大坂女學校及び邪蘇敎信者の手に成りたる梅花女學校、一致女學校、永生女學校、照暗女學校等にて敎課の程度は尋常中學科に比すべきものなり。

洋服と束髪 當地にて洋裝の日本婦人を路上に認むる事少し。 唯高等官及び紳商の夫人令孃は各冬服一襲位は貯へ居る由にて、一般大坂の婦人社會には洋服を排斥する者多く、束髪の如きも女學校生徒に限ると云ふも不可なき

が如し。 男女の共學 大坂府敎育會にては知事の諮問なる男女共學の可否に關し討議を爲したりしが共學の反對說終に多數を得しと云ふ。

○ 京都通信 當地の女學校は府立女學校及び同志社女學校最盛にして府立女學校には普通科レース織專修科裁縫專修科等ありて目今總員七百名に近しと云ふ。

○ 高等師範學校女子部。 全部の寄宿生廿五名は全校幹事敎諭舍監等と共に總て卅六名にて實地修學の爲め去月九日上總國鹿野山へ向け出發せり。同日午前七時校を出で靈岸島より小蒸滊に乘込み同午后零時上總國櫻井村に着し此日は同處に一泊し翌十日朝同處を立出て脚氣患者を除く外皆四里余の道程を步行して午前十一時鹿野山へ着し同山の神野山に止宿せり。滯在中は每日午前二三里の山路を辿り行きて植物を採り歸りて後各其說明を聞きて五日間に凡三百五十余種を集め得たり。午後は敎育の有益なる談話及び遊戯唱歌舞蹈抔催していと樂しげに學窓の苦を忘れたり。夕飯の後は九十九谷鳥居崎抔へ散步せり。 十九日の日蝕は鳥居崎にて觀察せしが叢雲

の防碍にて斑点を認め得ざりしは遺憾なりき。夫より十日間滞在の後廿日午前四時過歸途に就き、同日午後二時拔錨の小蒸滊に打乗り、六時過歸校せり。

○貴女の友。日下部三之介氏が女學雜誌の繼續者と爲りて今般題號の如き女學の雜誌を毎月二回發行せらるゝ由、寔に貴女の友たる名に負かざる雜誌なり。

○東京婦人教育談話會。仝會は來る十七日(第三土曜)に開會せらるゝとの事なり。

○私立松香女學館。神田中猿樂町の仝館は脩身、英學、讀書、詩歌、琴箏、點茶、裁縫等の學課備はりて專ら温良貞淑の女子を養成せらるゝ由なり。

○主幹　弊社の主幹武田安之助は社用の爲め去月二十二日大坂高知へ出發せり。

姫かゞみ

風琴調一節

美妙齋主人著

第三曲

Queen. "Whereon do you look?"

Hamlet. "On him,—on him……"

Hamlet.

其内に七月の學年試驗も首尾能く濟んだので阿角は本所の伯父の家へ歸ッた。伯父の家で日を過ぐして居る事ゆゑ阿角は阿丸に逢ふ事も無く、殊に此間の晩、阿丸の暴論を聞いた以來何と無く二人の交情が白けて來て、今斯う夏期休業となッても別に郵便の贈答とても無かッた。隨ッて阿丸の事に關て色々な想像も阿角の胸に浮んで來るが此想像が起ッて來る基は阿角が阿丸を惡く思ッた處ゆゑ從ッて其想像も皆「憎い憎い」の分子から成立ッて居た。殊に伯父の家で暮らして居る内阿角が常々見聞する處は些陳腐い伯父の議論と品行ばかり、浮世の事は僅に新聞と雜誌とで分解るばかり、胸に浮ぶのは母と高木との事ばかり、其上に、高木は漸進主義の人だと云ふ事を何處でか聞込んだので、此頃の阿角の品行は日々に變はるばかり、時に因ると其品行に何やら後過ぎた樣な處も現れて來た。思想の變化は實に不思議な物。今は夏休と云ッて誰も怠ッて日を送るのに、不思議な事は阿角の勉強、朝の七時から

十二時まではー人で書齋に閉籠ッて頻に洋書を讀んで居た。此洋書は何だらう。歷史だとサ。其外にまだ一個の不思議が有ッた。それはまた何。阿角が費す紙は大抵唱歌の草稿でサ。拔目は無いテ。

月はなかッたが景色の好さ、頃は八月の十日ばかり。此頃流行の俄雨、是は天の命令を受けて府下の灑水者となッた物か一時間毎位に遣ッて來て……蟬の音を止めたり牛に汗を發せたり……倏忽にして晴れる頃は快日も西山に入鹿の大臣、天津日を跟込む夜の配下、夕暮の御來臨。ソレ葉末の露は葉を階子として段々下に降り、アノ蝦蟇は石燈籠の蔭から這出して鮮肉の晩餐を極込んだ。天の雲は片々で、白いのもあれば紅いのもあり、中には一寸意氣がッて鍍金を爲た山もあッた。手許は餘程暗がり峠であッた。けれど阿角は書物を三國峠で無く只例の唱歌を頻に調べて居て更に餘念は那智の瀧瀬……伯父がズット這入ッて來た、

(伯)「何えた阿角。此暗いのにお前は燈火をも点けないで」………

(角)「オヤつい此景色を見て居まして……ホヽヽ薩張氣が附き

(伯)「恐ろしい風流人だネ。何か、彌兒とやらも左樣爲なく婦人でも無いと言ッたのかエ。」

(角)「アレサ左樣でも有りませんワ。最う最う彌兒なンぞを……妾も」……

(伯)「オヤ御前は彌兒と久保田さんを大層信じて居たでも無いかエ。」

(角)「否最う久保田さんをも……伯父さん、來年の夏休みにも妾も久振で國へ歸ッて阿母さんの御墓參をも爲たりまた」……

涙含んで

(角)「御爺さんにも御逢申して……エ……最う今迄の事を思ふと」……

(伯)「左樣か阿角それも本當か。今迄の事が何う爲たとエ。」

(角)「別に何うも爲ませんがネ……別に……何うも爲ませんがネ……本當に今の世の女生徒にも動もすれば過激な事を言ふ者が有りまして、アノ久保田さんなンぞも……妾も隨分伯父さんもじめ皆さんに御心配を掛けましたヨ。」

(伯)「ウヽそれぢやア御前も」……

(角)「是からも眞正の淑女と言れる樣に」……

(伯)「…爲る氣か。　何もそれも剛氣だ。　此間から己も御前の樣子が些と變だと思つて居たが、急に左樣爲らうとも思もなかッた。　が、何處から左樣爲ッたのだエ。　何にしてもそれも嬉しい事だ。　何か夫にも原因が有るだらう。」

緩くと問質されても阿角も流石に其仔細を伯父に告げなかッた。　唯談柄を外へ紛らさうと爲たが、其紛らしたのは矢張り心の内の烈い感情を僅に洩らした爲であッた、

(角)「何だか學校の規則が變はる相です子。　そして敎師も。」

(伯)「ハア敎師も變もると、何んな人が出る樣に爲るのか子。」

(角)「よくもまだ分明りませんが何でも高○とか言ふ人なども出る相でそ。」

(伯)「その人も御前の級へ出るのかエ。」

(角)「エ、エー、多分。　歷史を受持つとかいふ事で、」

(伯)「何う言ふ人かチ。」

(角)「大層よく御出來なさる相で……近頃評判な人でそと。」

(伯)「それは生徒の爲には結構な事だ。　デ、學校は愈此邊へ移ると云ふ事だが

………

(角)「最う慥に。丁度幸ですから妾は此九月から寄宿を止めましやうと思ッて居ます。何うも寄宿して居ると……否な人と一室に居たり何か爲ますから……」

(伯)「そして此處から通ふのか。成程それは至極宜からう。學校が遠いければ知らん事、近いけれバ寄宿を爲るにも及ぶまい。」

(角)「久保田さんの樣な……斯う云ふと變ですが……意氣過ぎた人と始終起臥を一途に爲なくてはなりませんからネエ。」

(伯)「變に久保田さんを惡く云ふネ。」

(角)「フヽン、でも」……

折から庭の飛石を傳ッて此部屋へ來たのは伯父の妻。年齢は四十前後。身体は「可も無し、不可も無し」で成立ッて居た。顔も「可も無し、不可も無し」、性質も「可も無し可不も無し、」人品も「可も無し、不可も無し、」＊＊＊手近に有ッた椅子を引寄せて其に腰を掛け、やがて夫の方を見て、

(妻)「貴君、最う那の事を阿角さんに仰ッたノ。」

(伯)「ウヽ、左様、左様、忘れて居る。」

(妻)「マア、貴君、何でせう。 阿角さん、明後日頃箱根へ往かうと思ッて居るッでせウ。 別に氣の詰まる人も有りませんから、何うでも往ッては」。

飛立ッて喜ぶだらうと思ひの外阿角は何やら變な面色で

(角)「オヤ左様、それは結構でせう。」

と云ッたばかり、行かうとは云はなかッた。

(妻)「御否なノ。」

(角)「否でも有りませんけれども、些し歴史を遣掛けて居ますから。」

(妻)「アラまた其樣な事を御言ひだヨ。 妾たちだとて幾日行ッて居ますものの。 チ國府津までの汽車も出來たけれどもまだ乘ッても見ないから、函根まで夫で馳ッて一[illegible]遊びて來ようと思ッたからの事でせウ。 高が三日やど」……

(伯)「それも正味は一日サ。」



十六



(妻)「チだから御出でなさいヨ。」
(伯)「往つくも好からう……どうだ往く氣は無いかエ。」
伯父夫婦が是程に折角勸めて呉れるので阿角も今は辞難ね、
(角)「有難う。それでは御伴を致しましやうか。御不都合は御座いませんか。」
(妻)「何の不都合が有りましやう吾儕三人だけだものを。」
此晩の談話は是で終結となッた。翌朝になると阿角の氣色が俄に變はッた。昨夜までは勇んで行く体でも無かッたのが、今朝はまた恐ろしく喜しさうであッた。朝は食事を為る時にも「函根の噺が箸と共に口から出たり入ッたり、一寸談話を為る時にも函根は幻畫が目先へ散付て……是には仔細が有りさうだ。處が不思議だ、今朝配達して來た新聞紙を阿角は始終眺めて居る。・ドレ其には何が載つて居るだらう。成程夫も其筈廣告の中に高木景遠と云ふ名で「小生儀本日「函根へ遊浴仕候」………
扨次日となッて阿角達の三人は函根へ出掛けた。「阿角の心には一種奇妙な妖怪が居るれで、阿角の目は始終其に役はれて頻にキヨロ〳〵として居た。

伯父夫婦も其邊を知らなかッた兎角の內に快二日過ぎて愈明日も出立と決まつた。今も此出立が阿角にも百足か蛇の樣に思はれた。湯が違ッて居たのだらう、高木も此邊に見えなかッた。阿角の心にも何うかして宿屋の宿帳を見たい」といふ考も徐々と首を擡げて來た。伯父夫婦も明日出立の支度を爲る……土產物を調へる……それが阿角にも否でならない……土產物までが憎らしく思はれる……雨でも降つて汽車が線路が傷めば宜い……眞逆夫程でも有るまいが此時の阿角の心も全く或る物の奴隸となッて居る、些見識が卑過ぎた。女權擴張に熱心であッた御禮が自身の見識を陋くする物となッたのか。行過ぎた處から蹴戻されて天保風に歸ッたのか。まだ性質も能く分解らぬ高木を、如何に人品ばかり美しいとて、斯う慕ふとは、ハテ何うも。色も褪易い物、實情も易らぬ物。褪易い物に迷ッて實情を餘處にし、それで百年の固が出來るものか。出來るなら其こそ賭だ百年の固めに頓着しないで只一時の情に牽かれ、それで種々に胸を惱ますなら其こそ獸の所爲だ。オイ、夫で淑女か。

「をしめども春の限の今日の日の夕暮とさへなりにけるかな。」其日も暮れ

ふ。いとゞ短い夏の夜が今夜ばかりか猶短かつた。憎らしい烏が啼いた。意地の惡い朝日が出た。人の氣も知らない、車夫が來た。七世の怨恨だ、宿屋の下女が下駄を直した。病氣ででもなければ宜いのに、伯父夫婦が生憎壯健であつた。踏拔ででもすれば宜いのに、車夫が馬鹿によく走つた。車は宙を飛んで行つた。阿角の心も宙を飛んで居た。其內に有處の方からも二輛ばかりの車が來た。何心なく阿角は、其車に乘つて居る人を見た……見た擦違ひさま。處が、それは高木であつた。ホンニ、マア殘念な。嗚呼阿角は嘸……嗚呼天保時代の阿角も嘸……

伯父の家へ歸つてから以來阿角の心も前よりも一層亂れて來た。けれど流石に忍ばうと思ふ考があるのでいとゞ猶胸も苦しかつた。時に因ッては自身の想像で高木の書姿を書いて眺めて見たり、高木の顏に似た顏が繪草紙の中にあれば故意々々雁皮に寫して見たり又は徒然の筆慰みには必「高」と書出しながら他に其を見られて悟られまじと思ふ處から其下へ出鱈目な字を附けて見たり、まだ／＼三世相で相性を繰らなかつたのが感心でありツた程……情

の切なるは可哀想であッたが心の狹さは馬鹿らしかッた。是が、既に人の妻と爲ッて居てそして夫に對する情であッたならば決して惡い事では無い。夫こそ優しい奥樣が出來る。唯處女の身でありながら斯うバかり思ッて居るのハ實に賴母しくない事で、是が反對から言はれゝば先浮氣だ。諄い言分だが此阿角は全く高木の色香に撲たれて、そして眼が眩んだのであッた。高木の心立ハ何んな物か、阿角がそれを知ッて居る筈は無い。もし一旦思が屆いて高木の妻とも爲ッた處で、さて高木の心立が惡かつたらば其時に此淑女は何う爲るか。我身に瑕が附くだらう。其にも心が注かないのか。否サ行末の事を思ハないのだ。是でも前にハ可なり高慢な事を言ッて居た。それで腹の中は此位だ。是で婦人の地位が高められやうか。女生徒と云はれる身分で居ながら矢張り男子の奴隷であッた。それで來年は卒業となる……そこでピアノをば能く彈ける……それで口前は中々甘く……そこで明治の新貴婦人サ。有難いナ。

今は阿角も學校が始まるのをバかり賴として居て、歴史の研究にも心を傾

けたが、何分思ふ樣に進まなかッた。朝の七時からハ時刻を違へず机にハ向ッたが、歴史をば繙いたが、併し動もすれば心が机の前を離れて函根の方へ往ッたり、又ハ眼こそ書物の上に向て居るものゝ直に字が見えなくなッた。是だものを進まなかつたのハ當前サ。進んだのハ心の狂駒ばかり。其内に學校も初まる頃となつた。時は九月の一日でまだ殘暑も強かつた。今日も何樣な着物を着て行くか、其邊が考物であつたが學校へ出た姿を見ると阿角も矢張り洋服打扮で、故意と捻つて薄瑠璃の上衣に更紗の下衣を着けて居たが、帽子が餘り白々しかつたもの、何うも反映が惡かッた。デモ當人も意氣揚々。心の中をば高木といふ語が隊伍を揃へて幾許も歩行て居た。眼も高木を認めやうと思ふのが專門であつたと見えて、直傍に久保田阿丸が居たのも見えなかつた。

(丸)「まことに御久振、江本さん。」

阿角も急劇に心注き、

(角)「オヤ是も久保田さん御機嫌よろしう。」

（丸）「つひ〱用事に取紛れて居て御無沙汰を」………

（角）「否、それも妾も。」

（丸）「校長の交もつてヨ。」

（角）「オヤ左樣。今度も何方。」

（丸）「マイ、エルダー、ブラザー（妾の兄）。」

（角）「何と云ふ方。」

（丸）「高木景遠。」

（角）「アツ。」胸もドキーン、眼もヒカーツ、身もブル〱顔もポカーリ。

（角）「アノ……高」………

（丸）「でも無いノ。本當も、ネ、久保田正和。」

（角）「久保田正和……些も妾も知らなかつたワ。」偸む樣ふホッと一息。

（丸）「だが高木さんも御氣の毒ネ。」

（角）「どう爲さるイ。」胸も又ドキーン。

（丸）「那の方も函根で……貴嬢、御存じないノ。」

(角)「否なんにも。眼も又さえます。
(丸)「御大病に御なんなさるとさぞ
(角)「さアそれも」ふ身も又ずかしく。
(丸)「嘸御心配。」……
(角)「アヽ。」顔も又[illegible]……

批評家甲―美妙齋もアンマリ心理を盡くさうと思つて却つて深く描き過ぎるから悪いといふ評が有るョ。英の「サッカレー」はあの通り優れた小説家だらう。然し深く穿ち過ぎるのと文を飾り過ぎるのとで一般の人氣を取れなかつたでぞ無いか。チト、君も「サッカレー」に心酔をる辭をば止めたが善からう。〇批評家乙―コレサ美妙齋。女子教育の雑誌に、たとひ純愛にもせよ、「リットン」などの二の舞は善くあるまい。大概の人も爲永さ一様に見るぜ。〇批評家丙―オイ美妙。君の文章も筆を飾もし過ぎてあるといふ事だ。是から洒落ずに書いてもごうだ子。〇美妙齋。―ハイ、併え……イヤ畏まりました。〇批評家丁―ノー〳〵

Fiat justitia ruat cœlum.

家政要錄

家内貯金の準備。

一家月次の收入れに一月の仕拂をなすにたらず、處處よりの借錢にてやうや

く勘定を取繕ふも世帶持に違ふまじと雖、かくても家族の幸福を全うすることを得るか、いと疑はし。畢竟家政の主眼とすべきことは其一家の收入の内にて費すところ最少く、得るところ最多からしむるにありとしるべし。英國の家政學者ウヰグレーは其著述せる書中に於て、家政の司にある方法の參考ともなるべき數言を記されたり、いまこれを左に譯出す。……

「かならず汝の收入より少き費用にて生活をたつへし、しかすれば汝はいとも平和に汝の職業をなすことを得ん。もし汝が收入れし全き高にて生活をたつれば汝は何物を貯ふることも能はざるべく、またいろ／＼の心配をもなさざるべからず。もしまた汝の收入よりも多き高にて生活をたつれば汝の一家は汝の幸福とは共に亡ぶ[illegible]ひたらん……」

されば家政の司にある方々よ。まづ「收入より多からざる」といへる文字を記臆せらるべし。言を更めて之を言へば、一家の收入は何程なりとするもまづ其幾分を貯へ、さて其殘餘にて生活をたつべしとなり。いま假に一月の收入を二十圓となし、十九圓九十錢にて生活をたつるは尙安全なりと雖、二十圓

と十錢を費すも既に恐るべきものありと云はざるべからず。但し其患ふるところは十錢と云へる金高にあらずして、十錢の不足を生じたる家計の不取締あるにあればなり。かゝる不都合を避けんには種々の注意なくては叶はぬことなれども、まづ其要なるものをあぐれば次のごとし。

第二家政に於て最忌み嫌ふべきことは他の補助に依頼することなり。世の中には常に他人を頼めるが故に終身獨立の生活をなすこと能はず從ひて眞正なる家内の幸福を享くることも能はざるもの甚多し。この輩の中には彼様よして彼様なることの回り來ることもあるべし、左あらんにはまづ何の苦もなく何と何は正しく我物なり、其をこの様にして彼をかの様にして……などと夢中にて己に都合よきことばかりを勘定して、しきりに合點きつゝ折角に一かどの收入をも得らるべき折さへも假初に打遣ぐることも多し。これに反して能く家内の諸入費を節約して假令少しづつにても常に貯ふる習慣ある一家は早晩頓幸福なる一家となるに至ること疑ひなし。かへす〴〵も大切なるは他に頼りたのむ心を洗ひ去るにあり。彼様にして彼様になる

べしあせいへる類を心を洗ひさり、よしやこのことはこの様にならずともかうしてああしてと用意をなせ、唯其区別はかうなれば……と、かうならずとも……との異にありとしるべし。

第二「我儘なる類を心を選ひ出してその代りに心にたもつべきことにて、即まづ先先のことの心積りをまへよりなすこと」なり。譬へば今日はこの中何拾銭程をのこし明日の用に充つべし」とか「この週はこれだけにてすまし、其余は来週の小遣にのこすべし」など先先のことまで細細と心積することを大切なり。　この習慣をこしらふるによき方案あり、即毎日曜日に於て其週の土曜日に至るまでの買物其他小遣等の詳しき見積書をこしらへおくべし。　もとより来客のありしがため、もしくは家族中に病人など出来せしがため卵牛乳などを購ふ等のことにて前の見積の通りにはならぬこともあるべしと雖、常に怠らず見積書を造りおきなるべくこれに頼る様になしをれば度を重ぬるに従ひて段段正しき見積をなすことを得るに至るべし。　この書付は之を保存しおきて、其週の土曜日に至りてこの見積と実際の入高とを比べ見て其多少を

詳しくしらべ、もし實際の入高見積よりも多けれバ其何の箇條にて多くなりしやを尋ね、もしまた少けれバ其故をも考へて、能能心付けれくべし。 常にかくのごとくなして怠らざれバ買物其他すべてに於て巧者になることハ云ふまでもなく先先のことを考ふる心も大にまして自然と貯金の心をむげまそ様になり、遂にハ家族の生活かたを高むることなどにも心付く様になるべし。されバ只今現に家政の司たる方方ハ早速この習ハしを始め給ふべく、また淑女の方方に於ても毎週の小遣などの見積をこしらへ今よりこの習慣を造り給ふこと肝要なり。

第三、つぎに大切なることハ「現金の法」にして、何物を購ひ求むるにも必現金を携へ行き、決して掛買をなすべからず。 現金にて買求むるときハ何物を買ふも己が好ミ通りになすことを得れども、掛買にてハ甚だ不利益なること多し。 もし掛買なれば其物のよしあしによらず商人の勸むるものをバ買ハねバならぬこともあり、また現金にて購ふときよりハ幾何か貴き價にて買ハねばならぬこともあり。 早い所が一月の掛なりとすれバ其間ハ商人が自分の金

錢を貸しておくと同じことなれば利益にも一足もひかぬ商人の持前として一月の間何の利益もなく自分の金錢を他人に貸しおく筈はなし、必相當の利息をつけをることは更に疑ふべからず。また前に云ひたる一月の收入よりも仕拂ふべき高の多きに至ることなどは皆掛買より起る弊害なり、もし常に現金にて仕拂ひたらんにはかゝる患はなかるべし。

第四、次にまた大切なるは「費したる金錢の勘定を明細に記しおくこと」なり。たとひ一錢なりとも記落しのなきやう丁寧に記しおくべし。いま一圓の紙幣を兩替にて二十錢の紙幣十錢の銀貨などに換ふれば、其費ることいと速にして「いま一圓をくづしたるばかりにてまだなくなる筈はなきに………」など返らぬ繰言を聞くは家政の司にある細君の方方の既に知り賜ふ所なるべし。しかしもし詳しく費したる金錢を記しおけば一寸之を開き見れば直に其行先を吟味することをも得らるべし。臺所の取締につきてよしとかわしとか小言を云ふものはこの書付にして、また次の週の見積を遣るにも其手本ともなるものなれば猶更詳しく記留おくべし。夫たるものが終日外にありて種々の

困難をも忍びて得たる金錢のことなれバ其費したる仔細をも知らする便ともなさざるべからず、ことに得るハ難くして費すハ易きやうなれば不親切に費さざることを夫に知らしめ、其終日の勞を慰むるも家内調和の一手段なればゆめ等閑に付すべからず。要するに一家のことハ夫ハ妻に頼り、妻ハ夫に頼り、幷に相合躰して生活すること一家の幸福を得るに於て最大切なればこれらの帳面ハ成るべく詳しく記しおき家族談話の種ともなし、また生活と高むるに付ての夫妻の相談相手ともなることを得れば、其の家政の司にある方方輕卒に看すごし賜ふことなかれ。

家の間取のこと。

學問の開けぬ野蠻の時代にありてハ種々奇怪なることを妄信し一身の上に害を蒙りしこと少しとせず。家の間取のごときも其一例にて例へバ「寢室ハ其質陰なるが故に之を家の北の側におくべし」などいへるハ近來に至るまで邦人の常に信仰したることなり。學問の力によりて生活をなす開化の

代とありてハこのごときも頗る稀に見る所ありと雖、習慣の久しき、志らず志らず今日猶其弊を脱することを能ハざるものなしとせず。いまこゝに云ハんとせる家の間取のことのごときハ直接に人身の健康に關係あることなれバ一入注意あらまほしきことなり。

こゝに一般の家に入用ある室を分ちて客間、居間、寝間、及び食堂の四つとす。もとより貧富の別によりて入用なる室の數も異なるべしと雖、其間取の道理に至りてハ格別の差なかるべきを以て其時に臨みて宜しき様に定むることを得べきを以てこゝにハ唯一般の理を云ふのみなり。間取の道理ハ甚容易にして「常に住ひ用ゐる所の室ハ之を家の南側或ハ南東側にとるべし」と云ふにすぎず家の南側或東側ハ必大陽の光線を受くるが故に空氣の清淨を維持することを頗良く其乾燥もまた速なるを以て、最よく人身の衛生に適當す。ことにかゝる室ハ冬暖にして夏涼しきを以て、常にこれらの室に住することを最愉快なりとす。いま試にこの道理を應用して各室の位置を定むれバ次のごとし

寢間は東に向ふを良しとす。これ早く朝日の光を受け、夜中吐出したる空氣を淨むるを得べく、ことに夏は午後は全く日蔭となるを以て夜に入りても室の熱きを覺ゆることもなく、風の流通よろしく、安き眠を得べきを以てなり。客間は東南に向ふを以て良しとす。或はまたこれを南に向はしむるも可なり。　居間或は小兒の爲に設くる室のごときは必これを南に向はしむべし。

食堂は家の北側に設くべし。またこの食堂に隣りて庖厨を設くること便利なるべし。　北に向ふ所は冬寒かるべしと雖も、食堂に入るの時間は常に少時にして、而も隣に臺所を設くれば其竈の火にて多少温まるべく、或はまた一時室を暖むる法を施すもいと容易なるべし。　夏も涼しきを以て食物を蓄ふるにも甚便宜なり。

如何にして食物を購はんか。

子供と酒につきて面白き談柄あり。　何時の頃にやありけん一人の老父あり或時子供に向ひていひけるには、

「これ悴。この徳利を持行ッて早く酒を購ッておいで。」
「ハイ、お父さま。錢は何處に御座いませう。」
「オー錢か。錢を出して酒を購ふは誰にでも出來ることだ。しかし、錢なしに酒を購ッて來るのが手品の妙ではないか。」

かくと聞くより子供は頭を打垂れ沈思してありしが、フト心付きたる樣にて其徳利を提げて走り出でぬ。やがて暫にして歸來り徳利を父の前にさし出して、

「サーお上りなさいませお父さま。」
「飲めか、馬鹿メ何處に酒がある。これは丸で虛空ではないか。」
「アイお父さま。徳利にある酒を飲むは誰にでも出來ることですが、しかし徳利にない酒を飲むのが手品ではありませんか。」

さて、いま記者が讀者の方方に申そこともまづこの類にて多くの錢を持ちゆきて能き食品を購ふは誰にでも出來ることにて、何の苦もなきことなり。しかれども僅ばかりの金錢を持ちゆきて能き食物を購ひ來るはこれ家政の

司におれそる方方の手品の妙にあらずや。されぱとて空虚の入物を携歸らんか、酒あれば酔もずにもそむことなれども、食物なれば饑餓に迫るの患あり。サテ、如何にしてよろしきや。其れ宜しく次號の出づるまで一先考へて見給へかし。

雜録

「じよあんだあく」(貧居の場)。

美妙齋主人舊稿

賤が伏屋の繰ゴトの　音色も濕る涙雨
降行く身てふ歎をば　刈慰むる奇少女。

夜も猶太く更けねども　流石鄙とて行通ふ　人とて更になつの月
快中天に掛かるから　背戸の刈麥照冴えて　針を編みたる筵にも
似たり、浮世のわび住處　繕もねばや門の戸の　塗色太く剝落ちて
斑とナラのはしらさへ　朽果てたれバ、長閑なる　日おれ羽蟻を出居なる
方を隱せるそで垣の　下にぞ生へる初見草　時知良にふたつ、みつ、

莟持つとハ名のみにて
古き儘にていくそ度
揉まれし事も無きからに
地合を厚く、光澤は濃き
送りもすれど、たゞ一つ
湧くにも似たる世の中の
家の樣にてシラ鳥の
燈火を的に坐りたる
圓くなりたる食卓の
色も日に燒黑みつゝ
田舍人よりまさりたる
晃く故にヨル光る
衣を縫ひつゝ其側に
這も物事をわきまへて

匂のみかも實さへだに
水にも入れど、夫を衣る
迭に愛づる情緣の
交情ぞと人もイヒ櫃の
胸苦しきもいとなみの
洋にたゞよふ捨小舟
帳もあらぬ窓のまた、
三人の人の樣如何。
這方の椅子に凭りたるハ
髯も生方よからねど、
風采ありげに見えたるを
珠を懸けしに仁田山の
在るも一人の老女にて
心に滓濘ハ無きならん

アラめに似たる馴衣、
親子もさしも水入らず、
絲さへ毫も得弱らず、
角も立たずに年月を
豐裕といふにアラ波や、
沈果てたる身なりとハ
運諸共にいと薄き
　角も敢なく擦減りて
五十ばかりの男子にて、
猶何となう尋常の
眼のつねに休憩無く
木棉か、麻か、綻びし
年ハ四十をコシ水や、
恒の婦人が水粧の

濁汚に更へて面色も
書を閲しつ在るからに、
最鮮明にあらはれつ、
推測らるゝ迄ながら
二個重ねて欲めにふる
差違あらじと見られたる。
夜眠なる故か、そもやまふ
兎にも角にも口吻の
最明瞭に知られたる、
たゞ柔荑の身をもちて

皺ありながら清らなる。
横様に射す燈火の
腮の肉しまり佳き、
書を押へし手の指の
爪の大きさもて推せば
唯その頬の色艶の
血氣薄かる故なるか、
結びたる様凛々しくて
そも故無きに非ずして、
倒れなんずる大廈をば

後の一人は俯向きて
影暗ければ笑靨まで
其口態も憮かしと
細やかなるに指環をバ
十バかりなる少女に
薄紅に見えざるは
其邊は未得知れねど、
最麗しきおもてとれ
此少女ぞ後つひに
支止たるジョアンなる。

(未完)

色紙、短冊書き方の事

わが邦には書籍に歌(殊に長歌)を記すの定式なし。短冊、色紙、懐紙の書き様に於ては歌よみの家に定式ありて古は頗やかましくこの法を知らざれば歌

は上手なりとも歌よみの席に入ること難かりし事もありき。然るにその定式は多く書學に關する事にて歌學の與る所にはあらず、去かし書學の預りの内なりとも、歌書く樣を歌よみが教ふるを強ひて悪しとは云ふにあらず。ただ美術の上に於て世の人を縛り、各得意の意趣を奮はしめざるは近古の歌人の癖なりけり。　古學の盛に行はるるに及び、歌文の境大に廣まり、陳腐の規則勢を失へり。　これ歌學革命の時にして、才ある者はこれに由りて才を伸べ、不器用者はこれを利として不器用を匿し苟無法不規則の事をすれバ則「われは万葉家なり、われは改進家なり」と申譯するに至れり。　かれも一時なり、これも一時なり。　規則の頑固なるを誹るとも己れが無法を辨護するに足らず。頑固なる規則も必基づく所ありて立てるものにして苟もその心を推し、その用を活動せしめバその術を益する豈寡からんや。　古ぼけたる余にあらずは誰れかはかかる「逢をわけて」淑女がたの御伽話しをせん。

まづ短冊の書き樣にて多く人の知る所は「短冊を三つに折り第一字を上の折り目にかけ云云」また上の句の第一字を本字に書かば下の句の第一字を假

名にせよ、下の句を本字にて初めば上の句を假名にて初めよ」等にしてこれ明に書學の美に屬せり。初めの規則は唯適當の位地を示すのみ、次の規則は「一樣なるを避くる」なり。抑美學に於てバラエティと云ふ事あり、變化を爲すの義にして、美麗を成すには甚大切なる事とす。字の上にて言へば、譬へバ、林の字の旁を撥ねて扁を撥ねず、二の字上書下に向ひて反れば下書は上に反らしめ、同字相並ぶ時は必その体を變ず。床の掛物に草花あれば花筒に花を挿さず。明月梢に在れば庭に燈籠を點せず。これ皆物の一樣にして相犯すを避くる者なり。婦人の衣服を着下すに襦袢の襟は強く合せて甚斜になり、上衣の襟は稍々直に近き抔もバラエティの意を含めり。されバ上の句の初字と下の句の初字と多書相並び、或は少書相並ぶはこのバラエティを失へるものにして人の目に快からず、故に一字は本字、一字は假名にせよと云ふも全く理なきにあらず。又「短冊を書くに成るべく同字を避けよ」と云ふ事もあり。

然るにかく規則として立てる以上も後學の者その何の意味たるを知らず、多書の變体假名を本字に並べ、極めて略したる草書を假名と並ぶる事常に見

る所にして、これ規則の文言にハ叶へども美術の精神を失へり。美術の意を知れる者ハ然らず、本字と本字と相並べても、或ハ書の多少を見計らひ、或ハ字の大小、墨継の濃き薄きを以て相照映せしめ自由自在の變化を成して人の目を悦ばしむ。然るを歌道の規則存する時ハ歌を書くに己が意趣の美を發することを得ず。規則の害も極れりと言ふべし。然れどもその本意を推す時ハ實に美術上大切なるバラエティに基ける者にて、このバラエティをば如何なる改進家も破ることを得ざるべし。

要するに色紙、短冊の書き樣も善く地位の釣合を取るを第一義とする者にして、書の進歩によりてこれを得べく、法則によりてハ妙に達し難し。終りに淑女諸君に助言せん、橘千蔭の新百人一首も唯字形の優美なるのみならず、位地の取り樣穩當にして、殊に百首百樣に位地を取りたれば釣合の手本としても變化の手本としても甚有益なる者なり。

論説

此欄に載する所ハ必しも本社の定説にあらず

女子諸君に望む。(承前)

高等師範學校助教諭上野銀子。

苟も教育を受けたる女子にして既にかゝる憫むべく笑ふべき有樣に陷りたるものあれば、さらでも女子教育の必需を感せざりし人人は此を見るより忽ち說をなして女子は貴重なる賃金と時間とを費して教育するに足らずと主張するに至りしかども、我政府の保護の厚きと教育家の盡力と女子各自の熱望とによりて其險を越え、險を陟りて遂に一步も退かず、其間時時世の風潮に上下せられて其方針を種種に轉じたることあれども進步は進步に相違なし。遂に明治十六年に至りて文部省は良妻賢母たるべき完全なる女子を養成せんがために高等女學校を設立し高等の普通教育を施されたり。されども當時猶生徒も其父兄も心を學術にのみ專にして、女子の重要なる職務たる家政の整理、稚兒の育養、病者の看護等に至りては措て顧みざるの傾きありしが十八年以後大に其課程を革められ、以上の諸件を隨意に專修することをさへ許されたれば、其教育の恩波獨妙齡の少女のみに止まらずして往往一家の主婦たるものにして通學するものあるに至れり。かく教育の法年を逐ふて改良せられたれば隨ひて女子の德性に、風采に、學術に稍完全なるに赴き、前段

のべたるが如き生意氣の女生ハ終に其跡を絶つに至れり。かくて又一方にハ社會ハ愈活潑に成り行けバ女子とても時に男子と應答せざるべからざる場合もあり公會に出づる場合もあり、外人に接する場合もあり、女子の業務ハ頗繁劇にして到底從前の如く室内にのみ閉居する能ハず。かく交際繁き場合にありて女子にして智識もなく德義もなかりせバ其失敗をとり榮譽を損することも少からざるべし。時勢既にかくの如くなれバ復女子の教育を閒然するものなく完全なる女子を養成せざるべからず良妻賢母を造り出ださざるべからずとの說ハ殆輿論となれるもののごとし。こゝに於て東京のミあらず他の地方までも公立私立の女學校追追出來たれども猶缺乏の訴ハ絶えざるが如し。實に女子教育の隆盛の運に向へることを疑なし。

然して此勢に乘じて益進歩せんよハ其注意を要することも亦容易ならず。夫れ物の盛なるに當りてハ心神之に眩惑せられて其間多少の弊害横ハるあるも之を見出だし得ると甚難く、且事の繁劇なるに當りてハとかくに外面をのミ修飾して内實を顧るに暇あらずして輕躁浮薄に流れ易きものなり。

故に今教育を受くる女子の最深く注意し最深く戒愼すべきは此輕躁浮薄に陷ること是なり。然るに如何に今日の開化は歐米より輸入せしといへばとて少き女子諸君の中には一にも西洋、二にも西洋と西洋の習をしとし云へば其方式作法をも深くは究めずして妄りに其外觀を假裝し、日本の舊風故俗を盡く芟除きて一足飛に日本を歐洲の中央に居ゑ付けんと云ふべき勢にて急進を試みらるゝ向もある樣に覺ゆ。己れはこの輕躁浮薄の行爲とは此等を謂ふなり。一國の風俗は偶然に涌き出でしものに非ず、必數百年の積習に因りて成れるものなれば百般の事態各相關係する所あり、縱令惡弊の事なりとも一時に其關係を絶つは甚難きことなり。まして日本の風俗なりとて盡く惡しきにも非ず、西洋の風俗なりとも盡く善きにも非ず、彼此を比較して其惡を棄て其善に從ふは取捨の宜しきを得たるものなり。かゝる時にても其惡弊を去るが爲に之と關係して相伴へる美俗を併せて失はざらんことを務むべし。又西洋の美を取るにも之に伴へる弊風を用ゐざらんことを最注意を加へざるべからず。

諸君、開明日進の世に生れ、其進取に急なるハ怪むに足らざれども、苟も取捨を誤りて輕躁浮薄に陷ることと勿れ。諸君の進行する方針ハ固より諸君の愛敬せらるる父母教師の指揮に從はるべしと雖、爰に亦其一助となるべきものを發見したり。希くハ女子諸君、其學習の餘暇、家事の間隙を見合ハし、此雜誌を閲覽せられよ、愉快の中に又自莫大の裨益を得らるることあるべし。諸君從學の道既に大に開け、其教課の完備せること復昔日の比に非ず。諸君智德の進むと進まざるとハ唯其勉強注意の如何に由る。諸君成業の上良妻賢母となりてよく家政を整理し、子女を教育して名工良冶の職を盡さば社會の和樂國家の幸榮之に過ぐる者あらざるべし、これ己が大に諸君に望む所なり。

ワガ敬愛スル、本誌發起ノ諸君。

高等女學校勤務　鮫島晉

ワレ玆ニ本誌發行ヲ賀スルノ榮譽ヲ得。ワレ故ナクシテ賀スルニアラズ、雷同重複ノ返響ヲナスニアラズ。ワレ社會ノ學ニ薄シト雖、願ハクハ理化ノ事實ヲ以テ本誌ノ主義ヲ贊セン。嘗テ念ヘラク宇宙ノ間常ニ二極ノ相對ス

ルアリ、二極調和シテ萬物ソノ序ヲ得。電氣ニ積消アリ、磁極ニ南北アリ、元素ニ在テハ金屬非金屬、水化物ニ在テハ「あるかりい」「あしつど」積消相調和スルニ足ラズ南北相平均スルニ足ラズ「あるかりい」「あつしど」相應ズルニ足ラザル時ハ萬物何ニ頼テカソノ序ヲ得ン。況消ハ積ヲ犯シ南極ハ北ニ傾クガ如キ、コレ理ノ必無キ所ナリ、苟コレアラバ天地嘗テ一瞬ダモ存スルコトヲ得ザラン。人間ノ男女モ亦カクノ如シ。

今ヤ男尊女卑ノ風漸衰ヘテ、男女同權ノ激波或ハワガ日本ニ及バントス。男尊女卑ハ兩極平均ヲ得ザル者、男女同權ハ兩極相犯ス者ニシテ共ニ成立スベカラザルノ理ナリ。

男子ト女子ト天質相異ナリ、職分隨ヒテ同ジカラザルベキハ生理學ニ質シテ疑ヒナシ。男女ノ生理分ヲ離ク、職分相混ズルハ蓋下等動物ニ於テコレアリ。且夫職分ノ愈限ラルル、位地ノ愈明ナルハ世運ノ自然ナリ。モシ男女權ヲ同ウシ、内外職分相犯シ、剛柔ノ性質所ヲ失ハバ社會會テ成立スルヲ得ベカラズ、否身体ノ生活己ニソノ序ヲ失ハン。

コノ故ニ男女ハ同等ナルベシ、同權ナルベカラズ、一体ナルベシ、一様ナルベカラズ。苟女卑ノ餘風ヲ脱シテ同等ノ尊キヲ保チ同權ノ激波ヲ避ケテ一体ノ幸福ヲ享ルニ於テ本誌ハ獨ソノ方針ヲ示スノミナラズ家政交際徳行美術ノ選ビヲ詳ニシ、凡舟車ノ摸範最新ニ最精ナル者ヲ示サントス。コレ趣旨書ヲ見テ知ルベキノミ。然レドモ泰山ハ土壌ヲ讓ラズ千鈞ノ重サモ銖錙ニ由テ移ルコレ、ワガ多言ニ躊躇セザル所以ナリ。

批評

小說草葉の露。原著は英國ブレトン女、口授はブラック氏、書取は市東謙吉氏出版は金港堂なり。この小說の主人公はベスと云ふ聰明、活潑の貧女なりこれが照映はルーシールと云ふ温厚慈善の貴婦人なり。ベスが一生は恩義に始りて恩義に終る。ベスは恩義に縛られて無賴漢に嫁し、後ルーシールの敎育によりて上等の人となり、恩義の故に戀情を抑へて病を得、遂に恩義の爲に意中人に代りて死す。その死するや兼ての覺悟にもあらず恩人の夫なり

己が戀人なるブルーノが死を見るに忍びず、恩義、情愛交發り、思はず身を投掛て前夫の刄に斃れしは哀なる趣向なり。和漢の小説に節婦烈女の覺悟甚潔きは唯その覺悟の際に人と感ずるのみ、末期に臨みて味甚乏し、誠にこのベスが最期の情の如きは婦人の優しく鋭敏き眞情なるべし。ルーシールの行は女子の爲に最よき手本の一なるべく、又西洋貴婦人の風采の一斑を知るに足るべし。文体は俗語体を潤色して稍陳臭き小説体を交へたり市東氏は聞ゆる傍聽筆記家にして、などて得意の腕前を塗隠されけん、これのみ甚疑はし。

家庭敎育。是も小池民次及び高橋秀太二氏の編輯なり。製本の体裁も見苦しからず挿畫の彫刻も緻密にして陋しからず、全篇之を智育德育及び体育の三門に分ち尤通俗に說做したるも太好し。然れども載せる處も混入りたる事にても無く、極めて通常なる事なれば、此書の望は普通の敎育を能くも受けざる父母に在るべし。既に普通の敎育を受けし者斯ばかりの事知らざらんや。既に然らば惜むべきも實例を擧ぐる事少なき、是なり。かゝる場合の

手段にて或ハ俗人の疑起るべき箇條に故さら若干の實例を擧ぐる時ハ其實例は到底理論の証據となりて幾分か信用を起さしむる方便となるべきなり。それも重立ちたる處のみにて宜し。細き處に渉るに及ばず。然るを此書にて其邊にハ太く心を向けざりし形迹ありし如なるハいと惜むべき事ならずや。次に挿畵も亦然なり。全篇の結構より見るも此書は兒童のためならず、父母の心得草なり、然るを挿畵を過分に入れしハ用意に過ぎし事にして、之がため起るべき益と云ふハさして多かるべうもあらず。たゞし中の秩序ハ整ひたり。尋常の父母ハ必一本を購ふて中々の利益を得べし。兒童なンどハ讀むに及ばず。

學藝

飯釜の蓋

水を煮る時ハ漸漸その熱さを増し、チンチンの空煮えより遂にグワラグワラの沸騰に至る。この時の熱度を測るに華氏寒暖計にて二百十二度なり。

これより如何程薪炭を加へても何様に煽ぎ立てても湯の熱度は更に上らず。そは何故かと言ふにこの二百十二度と云ふ點は湯が自由に蒸氣に化すべき時にして聊にても熱を得れバ忽これを奪ひて蒸氣となるなり。是を言ひ替ふれバ二百十二度の後に加ふる熱は湯を温めはせず、湯を擴げて蒸氣となす者なり。されバ湯の熱には限りありて、湯煮なり、湯煎なり、蒸籠なり唯二百十二を限りとしこれで煮えざる者は詮方なしと觀念すべきものか。否、さにあらず。熱を費して蒸氣を生ずることを妨げ防ぐならバ、その熱はいづくに往かん正に湯を熱して二百十二度以上に上らしむべし。

通例湯を沸す場合にて、二百十二度まで蒸氣が自由に發し得ざる譯は如何。何物かこれを妨げしやと尋ぬるに水面を壓す空氣の力なり。空氣は輕しと雖、地面上大凡二十里の高さに積り、水ならバ三丈五尺の重みあり。この重さを以て水面を壓すが故に水中の蒸氣は容易く出ることを得ず、必二百十二度の熱を得て膨脹の勢を逞しくして初めて空氣の壓し付けを破り得るなり。されば今空氣の壓し付けの外、猶一入壓し付けんが爲、鍋釜にシッカリと切り

蓋をなしたらバ蒸氣の出るを妨げ隨て湯の熱を増すべき事明なり。この道理をバ知らずながら實驗上にてこの應用をなすこと甚久し。其の最著しきは飯を炊くことこれなり。米は二百十二度の熱にては十分の煑ゑをなさざる者なり、故に飯釜には重くして且密なる切り蓋をなし、親が死んでも蓋取るな」又は「赤子は啼いても蓋取るな」抔乱暴なる金言を作るに至れり。鍋飯の旨からざるは全く蓋の關係に在るならん。栗、芋等の湯出もの、蒸しものに於てこの理を用ふること猶甚多し。

高山の上にては飯の出來悪しきもこの理に外ならず。其は上れバ上る程空氣の海の淺瀬に在りて壓し付けらるる事弱きが故に湯の熱は二百十二度に至らずして蒸氣自由に發し、是より更に熱を進めざれバなり。されバとて高き處には飯の出來方必悪しき者と思ひ諦むべきにあらず、上に説たる道理によりて蒸氣の妨げをなさバ何様にも十分の煑ゑを遂しむべし。この應用を失はずは生煑ゑの物を食ふことなく薪炭の徒費を省くこと寡からざるべし。

鹽水を以て鹽を洗ふ。

日本の鹽には苦味ありて漬物の味甚宜しからず。西洋の鹽鯡と日本の鹽鰯とを比ぶれバ實に天地雲泥の違ひあり。これ漬方の器用不器用もあるべしと雖まづは日本の鹽と舶來のテーブルソルトを嘗め比べて鹽の善悪ある事を知るべし。

鹽に苦味あるはニガリを含めるなり。ニガリは本來結晶の固体にして鹽の如き外見なるも、甚水に溶け易き性質ありて、空氣中に水氣ある時は直にこれを呼びてみづから溶け汁となりて滴り落つ。鹽籠の滴り、鹽俵の滴りは即この汁にして、これが滴れる後は鹽の性質幾分か宜しくなるものなり。かくの如く水に溶け易き物なれば、鹽濱にて鹽水を煮詰むる時、鹽を悉く取り出したる跡の少許の水の中に殘り得べき者を製造の粗相よりして分離十分ならざるなり。先年或る會場にて或る學士の演說せられしは「今日上品の日本鹽を買ふ事は實に得べからず。もし一家内にて平生旨き鹽を食はんと思はゞ、通例の鹽を僅の水にて攪廻して、[illegible]つし、これを籠に入れて釣り置きろの汁の

滴り尽せる後食用に供すべし」となり。誠にかくすれば常に美味の鹽を用ひ得べく、且潮煮等の料理に當り俄に焼鹽を求むるの煩らひ無からん。もしこの方法を用ひんと思ふ人あらば、余はこれに追加して最要用なる、最經濟なる、最巧みなる方法を助言せん。「この汁をバ貯へ置きて次の鹽を洗ふべし」と云ふことこれなり。

水は鹽をも溶し、ニガリをも溶し、砂糖をも溶す、而して溶す力には限りあり、鹽を溶して最早溶けざるに至れるを鹽の飽和液と云ふ、而して鹽の飽和液はニガリを溶すこと新しき水に異ならず、既にニガリに飽和せる後又砂糖を溶すこと新しき水に異ならず。されバ最初に鹽一斗を取り水三升にて攪廻したりとせんに、この水は多量の鹽の中に在りて十分の鹽を溶したり、この水は最早鹽を溶し難し。然れどもこの水は唯少量のニガリを得たるのみ、殊にニガリは甚しく溶くる者なれバ、この水は猶幾度もニガリを洗ひ去るの力あり。故にこの水を以て次の鹽を洗ふ時は最早一匁の鹽をも奪はずして唯ニガリのみを洗ひ去るべし。かくて最初の水の分量次第にて二度も三度も用ふ

ることを得べし。　毎度洗ひ水を棄るに比ぶればこれ經濟少少ならざるなり。抑飽和液を以て混物を洗ひ去るは工業、製造の道に於て甚大切有益なる術なるが、余は今家事に應用することかくの如し、想ふに家事の應用も唯これのみに止らざるべし。

社告　今般石橋助三郎氏も社員となられ候に付仝氏寄送の論文を寄書欄内に掲載する事を見合候且爾後仝氏の發起に係る東京金蘭會并に通俗婦人講談會の紀事を悉皆れらつめに詳錄仕るべく候

本號に前號の餘興謎手品の續を掲載致しまする筈の處記載すへき事項意外に多く紙員に限りありますれば今回ハお預りといたしますから次號の發兌までお第弐號の謎を御考の上御解草をお贈りありたし

新保磐次著
金港堂書籍

日本普通文如何　一冊

定價金二十錢郵稅金六錢

世ニ本邦普通ノ文字ヲ改ムルノ說多ク、又普通文章ヲ論ズル者ナキニ非ズ、然レ圧文字ヲ改ムルハ一朝一夕ノ業ニ非ズ、文章ヲ論ズル者未ダ則ルベキ說ヲ立テズ此書本邦普通文ヲ論ズル精細ニシテ確實ナリ因テ以テ普通文ヲ改良スルノ指針トナスベシ蓋シ此書一度出デテ本邦普通文ノ運命長久ナリト云フベシ江湖ノ君子一讀シテ其實ヲ知リ賜ヘ

小池民次著

○家庭教育　全一冊

定價金四十錢
郵稅金拾二錢

此書は當時の教育に基きて作りたる家庭教訓なれば人の父母たるものは常に能く是を讀み置きて其の子供を教へ導くべし然るときは其の子家に居ては父母の教を守り小學校に入りては其の學科を受くること器を造て物を入るるが如くいと易かるへし然のみならず成人の後賢き人となるも愚かなるも其本は家庭教訓の善惡しに由るものなれば子供持ちたらん人々は皆一本を備へ置きたきことにこそ

中川元譯述

文華の燈

教育美談　一巻○定價四十錢○郵稅金十二錢

本書は兒女教育の要綱を原著者エルチストレグーウベー氏が自から愛兒を育成したる實跡に擬して叮嚀懇切に說き示し恰も彼の有名なるルーソー氏のエミールに稍や類たるものあるを中川君博雅の筆を以て極めて平易に極めて小說體を主として飜譯せられ加ふるに傍訓を附したれは童蒙婦女子と雖も一讀忽ち其意を解し深く興味に入るの間自から教育の要旨に通ずるの趣ありて苟も小學の教育に從事する諸彥は勿論世の慈父たり慈母たらん者坐右必ず一本を欠く可からずと云ふ

東京本町三丁目
金港堂原亮三郎本店

大坂北久寶寺町
金港堂原亮三郎支店

●農工商雜誌

毎月壹回發行
目下第四號發兌

本誌ハ農業山林水產工業商業ノ五門ニ區別シ各門ニ關スル實地製作法及改良發明等其他當業者ノ參考トナルヘキ雜件ヲ揭載シ主トシテ產業ヲ興殖スルヲ以テ目的トナス本誌發行日尚淺キモ大ニ江湖ノ好評ヲ博シタリ

○定價六冊前金三十三錢○十二冊前金六拾錢○外郵送稅一冊ニ付壹錢○見本ハ壹錢切手七枚ニ

テ遞送スベシ

東京神田小川町壹番地

農工商雜誌社

新版書 特別減價 廣告

●米國裁縫師ニリノトー氏校正
●日本大家松之助君編輯

男女 西洋服裁縫獨案内

定價金一圓●特別減價四十錢●稅郵十四錢

●駒木貫一郎君編輯

圖入毛糸編物法

定價金八十錢●特別減價卅五錢●郵稅十二錢

●報知新聞社々員西浒生先生著

西洋風俗記 定價金三圓●特別減價四十錢●郵稅十八錢

●風月庵主人編輯●頴山逸士序

日本西洋 插花水揚法之秘傳

定價金一圓●特別減價五十錢●郵稅十四錢

遞信省認可

●石原成軒編輯

染工必携 萬色染法獨案内

定價金一圓●特別減價五十錢●郵稅十二錢

實地經驗 技術全集 定價金五十錢●特別減價十錢●郵稅四錢

右の書籍御披露の爲め本日より向ふ三十日間特別減價ふて差上候間遲延なく御注文被下度候着金の上ハ早速御送本可致候但し郵便切手代用ハ二割増の事

出版發賣所 大阪東區常盤町百十八番邸 **大阪書籍會舍**

每月第二土曜發兌○一冊定價金八錢○六冊前金四十五錢○十二冊前金八十錢○府外の分は郵稅申受郵劵代用御斷申上候

持主兼印刷人 新保磐次

編輯人 正木政吉

東京本郷區湯島天神町壹丁目五十九番地
發行所 成美社

同 神田區雉子町三十二番地
大賣捌所 團々社支店